

狂人語り・寓喩・異世界

芥川龍之介「河童」をめぐる三つの問い

——(二) 寓喩——

池上貴子

はじめに

現在、「河童」が社会諷刺性をもった寓意小説^①か、あるいは吉田精一の言にあるように芥川自身の「せつばつまつた心境のみを語つてゐる、局限された世界」^②が表されている作品かといった議論は出尽くしたと言われている。構造主義を通過して以降、テキストと作家芥川^③の思想や状況を直接結び付ける解釈は斥けられ、テキストそのものから時代状況や精神世界、語り手の語りの構造を分析（物語論）する方法へと完全にシフトしたといえるだろう。

しかしながら、発表当時、多くの読者が「河童」の物語世界に社会諷刺的な意味を読み取っていたことは無視でき

ない。同時代人は社会的な読みの枠組みを共有することで、「河童」の作品世界を形成していたのであり、一方、現代の我々はそのフィルターが機能せず、読み手の立ち位置を失った状態から「河童」の読みの枠組みを再構築する状況にあるからだ。作品世界を構成する対象たちが社会諷刺という寓喩の効力を失った時、残されるテキストはどのように我々に読み取られていくのか。おそらく、現代に読みとって残されるのは、作品内に展開する二つの語りの領域だろう。

一つは、「河童」という架空生物は人間の寓喩であり、河童社会は人間社会の寓喩である。そして狂人がその裏返し^④の体験を語っている」と、語り手に解釈されながら展開する語りの領域である。「序」における語り手（後に本編の聞き手）と精神病院院長の「S博士」を代表とする人間社会（共同体）で共通認識される言説がこれにあたる。彼らは狂人の言語を自分たちの世界の言語で解釈し、それを寓喩として語りなおす機能をもつ。

またもう一つは、未知の生物「河童」の住む「河童国」を、実際に訪れたが、帰国後に狂人認定され精神病院に収監されている「僕」の実話の領域である。ただし、前回（「狂人語り」）で示したように、その語りは、対象が「誰でも」行われ、繰り返され、短いエピソードが切り替わって

いく主観的な言説に終始するスタイルを持つ。

そして両者は交わらない。「序」の語り手が「可なり正確に写した」と自負しながら、一方の本編「僕」の語りは、次元を別にする物語であるといえる。かつてロラン・バルトは『エクリチュールの零度』で、フランス語で物語を語る場合に基本的に使用される「単純過去形」に触れ、「単純過去はもはや時を表す役割を担っていない」と断じ、さらにジェラルド・ジュネットら物語論者たちも「語り手の語った物語＝語り手と同一線上の時間軸にある過去」といった単一の時制を否定することで、語られる物語の現在を別枠の世界のものとすることから出発している。「河童」もまた、本編の語りの領域は、前回示したように、「河童国を訪問した物語」↓「実は語り手の『僕』は狂人であり、今までの話は妄想だった」といった、「序」の語りの時制に収まるものではない。「精神病院の患者である第二十三号の話はかなり正確に聞き取った僕」の物語と、「河童国を訪問した僕」の物語が、強度の上で拮抗しながら交わらずに存在している状態をこそ読み取っていく作品なのではないか。

本稿では、「河童」を構成する二つの語りの領域（物語領域）を理解するキーワードとして、「寓喩」を設定した。まずは社会諷刺という当時の語りの枠組みを改めて確認し、

後に立ち上がる二つの語りの領域と、読み取られていく言説の強度にアプローチしてみたい。

（1）時限つきの寓喩——社会諷刺というフィルター——

斯して「河童」が表れた。社会の波、思潮の波が、芥川龍之介氏なる一個の文人を激しく打って、「河童」の筆をとらしめたのであらうが、それは前にも云つたやうに、芥川氏の内部闘争の総決算として、彼に光明と希望を与えるものではなかった。

作家片岡鉄平は、大正末期に怒涛のように押し寄せる社会変革や新しい思潮の波を同時代人として感じ取り、共感的にそれらを「河童」執筆の動機とみていた³。また、「河童」発表当時、昭和二年四月の「新潮合評会」で林房雄は、「社会のあらゆる現象を作品に取入れて批判を投げる諷刺文学が社会主義作家に依つて先駆されずに芥川氏に依つて先駆された——それが面白いと言ふのです」と、現代の社会情勢を取り入れた諷刺文学への着手を評価している。つまり、基本的に当時の文壇は前提的に「河童」を、現在の自分たちを取り巻く社会的事象や思潮を題材にした寓意小説の試みだと見なしていたのである。実際、「河童」各章に取り挙